黄帝医籍研究

真柳　誠　著（茨城大学教授）

汲古書院

古代から現代までの医学知見と人文諸科学の成果を統合し
素問・靈枢など黄帝医籍六文献の歴史を俯瞰する、
待望の研究書なる

真柳 誠『黄帝医籍研究』を推挙する

小曾戸　洋

待望の真柳氏の著書が出る。久々の読みごたえのある中国医籍研究書である。

中国伝統医学（漢方）の根幹をなす典拠は『黄帝内経』『神農本草経』『傷寒・金匱』の三大古典である。今回の氏の著作はいうまでもなく『黄帝内経』に関するもので、ここにいう「黄帝医籍」とは、いずれも正式書名に黄帝の名を冠する『素問』『針経』『霊枢』『明堂』『難経』『甲乙経』『太素』のことである。

およそ中国古典を研究するにあたっては、まずその書誌を明らかにする必要がある。研究の対象とする書物が、いかなる経緯で書かれ、どのような伝承のもとに今に至っているかが不明確では、その研究自体が成り立たない。氏の著作は長年の研究成果をまとめた労作で、書誌学を基本とし、新出の資料をふんだんに取り入れている。その上で独自の論を展開しており、従来の先達の水準をはるかに越えた歴史に残る名著といっても過言はない。

本書が出版されたからには、今後『黄帝内経』さらに中国伝統医学の研究をめざす人は、この書に目を通す必要が生じたといえるであろう。本書を高く評価し、広く推薦するゆえんである。

（日本医史学会理事長、北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部部長）

序説　黄帝医籍

よくよく考えてもわからないことがある。
それでも考えつづけると、鬼神のようにわかるだろう。
だが鬼神によるのではない。精気の極致がなせるわざである。

思之思之　又重思之
思之而不通　鬼神将通之
非鬼神之力也　精気之極也

『管子』第四九篇　内業

「黄帝医籍」とはわたしの造語で、おそらく過去にも用例はないとおもう。このため、造語した意図やその範疇を即座に想起するのはむずかしいかもしれない。しかし「黄帝内経」や *Huangdi Neijing* あるいは *Yellow Emperor's Inner Canon* ならば、およそ漢字圏の伝統医学関係者および世界の中国学研究者は、かならずや見聞したことがあるだろう。その中核が『素問』『霊枢』たることは周知に属する。両書にしても、拙著であつかう他の黄帝医籍にしても、個々の注釈書・研究書・入門書はまさに汗牛充棟で、古典的名著から近現代の著述が巷間に流通している。

◎従来の中国伝統医学研究の水準をはるかに越えた歴史に残る名著なる！

黄帝医籍研究

茨城大学教授　真柳　誠　著

いま伝統医学研究は各国でめざましい発展をとげている。史学や人類学の一環として医療史をあつかう研究も増加してきた。しかし文献の成書年代や使用底本の問題がしばしば見うけられ、これらを曖昧にする例もすくなくない。とくに本書で取りあげた黄帝医籍の各書は、中国・日本・韓国と欧米で注釈書や入門書があるものの、歴史を俯瞰できる研究書がなかった。「黄帝内経」伝説がいまだ跳梁跋扈しているのは、そうした理由もあろう。

各書については多くの先哲が論議をかさねてきたが、未解決の問題が山積し、遺憾とすべき情況にあった。原因は多面にわたるが、主には医学古籍が北宋代と江戸後期を除き学問の正式対象とされず、およそ史料批判がなされていなかったこと。このため多様な問題点が錯綜し、解決には人文科学諸分野の手法と成果を援用しなければならないこと。同時に古代から現代までの医学の素養も必須であること、などなどが関与している。たとえ革新的であろうと、単一の視点や手法では到底解決できない。

【著者紹介】

茨城大学人文学部・同大学院人文科学研究科教授（中国科学史）、日本医史学会常任理事・
中国出土資料学会理事・東亜医学協会理事・日本薬史学会評議員

黄帝医籍研究・「素問」「針経」「霊枢」「明堂」「難経」「甲乙経」「太素」・黄帝医籍研究・「素問」「針経」「霊枢」「明堂」「難経」「甲乙経」「太素」・黄帝医籍研究・「素問」「針経」「霊枢」「明堂」「難経」「甲乙経」「太素」・黄帝医籍研究・「素問」「針経」「霊枢」「明堂」「難経」「甲乙経」「太素」

▼A5判上製・630頁・本体価格6000円　ISBM978-4-7629-6528-9 C3010　14年11月刊

汲古書院
〒102-0072　東京都千代田区飯田橋2－5－4
電話 03（3265）9764　FAX 03（3222）1845
E-mail:kyuko@fancy.ocn.ne.jp（営業部）

現在の『素問』『霊枢』には中国伝説上の三皇五帝の一人、「黄帝」と臣下の問答形式による論述が多数ある。これもあって両書を『漢志』の「黄帝内経」とむすびつける上記の類推がうまれ、両書名に「黄帝」や「黄帝内経」を冠することが千数百年以上つづいてきた。現在も中国のみならず世界各国で『素問』＋『霊枢』＝『黄帝内経』とされ、あたかも定説のごとく語られている。

さらに両書の原本が成書した以降、関連した医書が初唐まで編纂されつづけてきた。問答形式や『漢志』の医経に該当する内容、あるいは両書に類似するか発展した内容がみえる。『難経』『明堂』『甲乙経』および『太素』である。これらにも「黄帝」や「経」の付加ないし「黄帝内経」を冠することが徐々にひろまってきた。当伝承史ゆえ、わたしは以上の各書を「黄帝医籍」と総称することとした。各書は内容のみならず、成書や伝承・普及の経緯が相互に関連しているため、一括して考察しなければならないからである。

いま先達の研究成果と提起した問題をふまえて検討するならば、かつて未知の史実を見いだすことができるだろう。史実と史実をむすぶ歴史現象に光をあてることも不可能ではなかろう。あるいは伝説を検証し、従来の論議に終止符をうつことができるかもしれない。こうした予測ないし希望にもとづき、わたしは拙著を執筆した。各書の内容についても旧説を超克した研究が今後もなされるだろうが、その視座を江湖の諸賢に提起するためでもある。

しかし各書の史的問題は同一でもない。版本系統が問題の『素問』、伝承史が問題だった唐代までの『九巻』『針経』と宋代以後の『霊枢』、旧態がよくわからない『難経』、成書年代と現存本の来歴が問題だった『甲乙経』、成書も伝承史も不明瞭だった『明堂』『太素』、などの相違がある。ゆえに各書それぞれの問題にそって論述せざるをえない。このため個々の考察をはぶいても論旨を把握できるよう、各章の文献ごとに概要・成書・伝承・現存本などの節や細節をもうけた。考察が多面にわたった場合は、小結や結語・総括を細節や節・章の末尾に付した書もある。書末には拙著で言及やあきらかにした「所出文献関連年表」を付録し、向後の利用に供した。

黄帝医籍研究　目次

序説　黄帝医籍

第一章　『素問』

第一節　序　論

概要／成書／唐代までの伝承／版本系統

第二節　北宋版

①熙寧二年（一〇六九）新校正本／②元豊間（一〇七八～八五）孫氏校刊本／③宣和三年（一一二一）校刊本

第三節　南宋版

④紹興二五年（一一五五）刊本／⑤紹定（一二二八～三三）重刊本／⑥南宋末詳年坊刻本／⑦南宋中後期坊刻本

第四節　金　版　⑧金末蒙古初刊本

第五節　元　版　⑨前至元二〇年（一二八三）読書堂刊本／⑩後至元五年（一三三九）古林書堂刊本

第六節　明　版　⑪嘉靖二九年（一五五〇）顧従徳仿宋刊本／⑫明・無名氏本

第七節　総　括

第二章　『針経』と『霊枢』

第一節　序　論　概要／成書と問題点

第二節　宋代までの伝承

歴代の記録／『九巻』佚文と現『霊枢』／『黄帝針経』佚文と現『霊枢』／不全の『針経』『霊枢』と完本『針経』『霊枢経』の出現

第三節　北宋・元祐本『針経』

高麗本『針経』の将来と王欽臣の上進／元祐本の旧態／北宋末・南宋初に引用された『針経』『霊枢経』／金・

蒙古代に引用された『針経』『霊枢経』／元祐本『針経』と現『霊枢』の関係
第四節　偽経の『霊枢経』九巻
『針経』と『霊枢経』／『霊枢経』の実態／出現と湮滅
第五節　南宋・紹興本『霊枢』
校刊経緯／書名の改変／巻数の変化と版式／総目の付加と銜名・篇目の削除／改変の意図と背景／音釈の付加／校注の「一本」／元祐本への校正／来歴と特徴
第六節　現『霊枢』の諸本
明・無名氏二四巻本系／元・古林書堂一二巻本系／和刻九巻本系
第七節　総　括
第三章　『難経』概説
第一節　概　要　　第二節　成　書　　第三節　伝　承　　第四節　版　本　『難経集注』／『難経本義』
第四章　『甲乙経』
第一節　概　要　序文の記述／書名と巻数／内容
第二節　成　書　皇甫謐説の問題／編者と年代
第三節　伝　承　歴代の記録／唐政府の校定／北宋の医官育成と医書出版
第四節　現存本　明・医統正脈全書（医学六経）本／明・藍格抄本
第五節　結　語
第五章　『太素』
第一節　概　要
現状と構成・内容の特徴／『太素』経文と『素問』『（針経）九巻』の関係／『甲乙経』の影響
第二節　成　書
楊上善の著述／『太素』の撰注年代／楊上・善の墓誌／「上善」と『太素』の撰注背景／李賢と『太素』の成書年

第三節　伝　承
唐宋代／日本への将来／阿倍仲麻呂と吉備真備の関与／医官育成と『太素』の消長／教育の日本化と『太素』の伝承
第四節　現存本　仁和寺本／釈文と校刊本
第五節　総　括
第六章　『明堂』
第一節　概　要
孔穴数と命名／条文形式／孔穴記載順次、篇だて、篇配列、孔穴図示、五行穴／主治文記述形式と意図／甲乙『明堂』の輯佚／総論の存否／「明堂」という書名
第二節　原『明堂』の成書と旧態
背景／『明堂流注図』と『偃側図』／成書年代／敦煌本からの知見／原『明堂』の旧態／穴名下の一穴・二穴／原明堂『流注図』の概要
第三節　原『明堂』の孔穴配列と経脈循行の概念
頭髪部六篇／背部三篇／顔面頸肩部四篇／胸部等五篇・腹部等五篇／上肢六篇・五九穴、下肢六篇・七九穴／孔穴・経脈の認知と『明堂』
第四節　魏晋・六朝・隋代の伝承・変化および影響
改編本・増訂本と異本の出現／禁灸穴の増加／禁灸の背景／禁穴の論理化／『隋書』経籍志の著録と医官育成
第五節　唐代の『明堂』文献
楊玄操注『黄帝明堂経』『明堂音義』／甄権『明堂図』／李襲誉ら増修『明堂人形図』／『千金方』所収本／楊上善『黄帝内経明堂（類成）』／『外台秘要方』所収本／付説『医心方』所収本
第六節　総　括
付　所出文献関連年表／後　記／書名・人名・事項索引